

# 目次

はじめに

第二章 志を立てる

第一章 蒼龍窟の誕生

継之助の勉学 / 27

九代藩主牧野忠精 / 31

元旦に誕生 / 9

十七天に誓って輔国の志を立てる / 36

河井家の先祖 / 12

読書好きの継之助 / 40

良寛が河井邸をたずねる / 16

義を明らかにして / 43

母の貞の気性 / 20

河井継之助の屋敷 / 47

継之助の容貌と性格 / 24

第三章 運命を切り開く

最初の江戸遊学について / 51

久敬舎に入塾する / 54

第五章 義理に生きた人生

ペリー来航 / 58

継之助の卓見 / 95

継之助の建言が人生を変える / 62

長岡藩政改革の一端 / 99

宮路騒動を裁定 / 66

明治維新と長岡藩の立場 / 102

## 第四章 生涯の師に出会う

遊学と雌伏 / 71

蒼龍窟の昇天 / 108

刈谷無隠の話 / 74

河井継之助関係年表 / 111

出処進退を問う / 79

両親から五十両の資金 / 83

あとがき / 116

山田方谷に会う / 87

山田方谷の教え / 90

歴史的仮名遣いを現代仮名遣いとした。  
送り仮名は現在の標準的な使い方とした。  
出典中の俗字などは現在使用されている字体とした。  
漢文は読み下し、句読点を打ち読み易くした。  
出典の中の明らかな誤字は訂正したが、一部原文のままとした所もある。

## はじめに

越後長岡（新潟県長岡市）では、幕末の長岡藩執政河井継之助つぎのすけを豪儀（ゴージ）な男だという。郷土史家で北越新報社の主筆をしていた今泉鐸次郎たくじろうが「どうも河井さんは豪えらすぎた男だ」といつている。

ゴージとは、長岡弁で度量の大きい人物をいうのだが、薩長の勤皇志士よりも河井継之助の方が偉かったという意味も含まれている。

そもそも、河井継之助の人物評価は、今も長岡の町を二分している。町を焼いた男から、薩長（明治新政府）に一泡ふかせてやった男まで幅が広い。だいたい封建時代において、彼の発想は奇想天外なものだった。それに陽明学が加わるのだから、奇行にはことかかない。しかも、王陽明の「物情の向背こうはいをあきらかにして、その機を握り、陰陽の消長を察して、その運を来らしむ」を愛誦していたというから、機をみるに敏であった。むしろ、先見性を持っていたというのだ。その先見性があったなら、なぜに越後の小藩に怒濤どとうのように押し寄せてきた新政府軍に立ち向かったのだということになるが、抵抗主義の河井継之助らしく正義を貫こうと

する。

作家の司馬遼太郎は「彼は商人や工人の感覚で長岡藩を再生したが、最後は武士であることにこだわった」としたが、男の一分を立てることを第一義とした男だった。最後は戦傷によって無念の最期を遂げる。そんな悲劇性も河井継之助の魅力のひとつである。

しかも、禄高百二十石の家柄でしかない藩士が、幕末、借財であえぐ長岡藩にあって、登用されて、改革を断行するさまは、まさに見事である。そういう男が、幕末の長岡藩に彗星のように現れるには、それなりの事情が長岡藩にもあった。それに、河井継之助のような人物が育つ土壌もあった。

慶応年間、河井継之助の指導で藩政改革が断行された。その結末は、戊辰戦争の勃発で全容が見えずに終わってしまったが、途中の成果では、見事な最強兵団を創りあげたことでも十分、評価できるのである。

河井継之助が修業中の久敬舎時代に、鈴木虎太郎という少年に語った言葉が残っている。「人間というものは、棺桶の中へ入れられて、上から蓋ふたをされ、釘を打たれ、土の中へ埋められて、夫それからの心でなければ何の役にも立たぬ」である。事を成そうという男にとって、己おのれの死後、自らが決断し行った業績を、他の者がどう評価しようが構わない。大切なのは己の信ずる良心のまま、正しいことを断固行うのみだというのである。

時代の流れを読む人物は数多くいる。しかし、時代の流れに逆ってまで、己の信念を貫こうとする人物は、稀有である。まして、時代の先を読んでいた河井継之助の洞察力が、敢えて反抗する人物に徹したのである。

本稿は今泉鐸次郎著の『河井継之助傳』に依拠している。今泉鐸次郎は明治二十六年（一九三三）に、当時勤めていた東北日報に「河井継之助傳」の項を起こし、昭和六年（一九三一）に目黒書店刊『河井継之助傳』の最終発刊によって、河井継之助の生涯を網羅した。今泉自身、長岡藩士の血を引く士族であったから、幕末の英傑河井継之助の真実を伝えたかった。また、改進黨員でもあった今泉鐸次郎にとって、河井継之助のデモクラシー的思考は魅力的であった。

幕末の長岡藩は富国強兵策を推進したが、その根源に民衆のために国家（藩）が何を為すべきかと命題を掲げて改革を行った。河井継之助はその改革運動の中心にいた。

作家司馬遼太郎は、三百諸侯の幕末の家臣のなかで、長岡藩家老の河井継之助を採りあげ、歴史小説『峠』を執筆した。作家の眼が、どう河井継之助の人物像を捉えたかは、ベストセラー作品になったことで証明されている。

河井繼之助（一八二七—一八六八）の肖像



# 第一章 蒼龍窟そうりゆうくつの誕生

## 元旦に誕生

河井つぎのすけ繼之助は文政十年（一八二七）一月一日、長岡城下の長岡藩士河井代右衛門だいうえもんと貞ていの長男に生まれている。最初の幼名がどうであつたかは伝わっていないが、河井代右衛門家の嗣子である繼之助を通称とした。

元旦（旧曆）の寅の刻に生まれたというのが定説であるが、今泉省三の『忘却の残塁』では正午だという説もあると述べている。寅の刻は七ツどき、いまでいう午前四時ごろであるから、もう少しで暁がみられようという薄暗さのなかで誕生した。

その産声うぶごえは時代の夜明けを告げるものであつたかどうかは、のちの長岡藩の改革をみてもらえば分かるだろう。

元旦は長岡藩士が総登城をする。午前八時に太鼓櫓たいこぐらから、城下に

### 蒼龍窟

蒼龍窟は河井繼之助が自ら付けた号名である。自邸に二本の松樹があり、そのさまが天に昇る蒼龍のようだと付したともある。また、禪に精通していた繼之助が碧巖録からとつたという説もある。すなわち、伏竜は必ず天へ昇る例えがある。

河井繼之助が生まれたところの「文政年中・長岡城下図」



殷々と太鼓の音が鳴らされる。

文政十年の元旦は、穏やかな日であったという。それでも、城下の積雪は五尺（一メートル六十センチ）近くあった。藩士は、長柄組が、除雪してくれた雪道を、裸足に雪駄ばきで登城する。厳寒のなか袴姿で、細雪をさけるために唐傘をさしている武士もいる。

父の河井代右衛門は家督を相続し、厩詰であったから当然、元旦には登城している。継之助が寅の刻、生まれであれば、長子誕生の喜びを胸に登城している。

実は代右衛門にはすでに三人の娘がいた。長女いくは、先妻との間の娘。先妻の豊はいくを産むとすぐに没している。後妻の貞との間にすでにふさ、千代子の二女がいた。河井家の四人目の子によく男子が授かったのである。喜びもひとしおであったにちがいない。登城し、大広間にて、藩主の前でお流れを頂戴する。たった一杯の酒であるが、家臣はそこで忠誠を誓うのである。

越後長岡藩七万四千余石の譜代大名。三河国牛久保（愛知県豊川市牛久保町）出身の牧野氏の城下町。知行・扶持どりの侍が約六百